

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

障害児学校の大増設求めて力あわせよう 昨年度の到達点に続き頑張ろう

第33回大阪の障害児教育を よくする会総会

6月13日、第33回大阪の障害児教育をよくする会総会が開催されました。今年度はコロナ感染症対策のため、会員に事前に総会議案を送付し、意見集約をしたうえで、運営委員会で2021年度活動方針案・予算案・役員体制を確認しました。午後からはオンライン併用の学習会を開催し、土佐いく子さん(和歌山大学講師)が、「こんな会だからこそ人とつながり希望をたぐりよせたい」と題して講演しました。

粘り強く声をあげ続けよう

総会開会のあいさつで、会長伊庭裕美さんは、5月に公表された文科省「特別支援学校設置基準」(以下、「設置基準」)についてふれ、堺市立の支援学校では、PTAが呼びかけてパブリックコメントにとりくんでいることを紹介しました。長年の運動が実を結んで策定される「設置基準」が実効あるものと



閉会あいさつで発言する
岩田新会長

なるようとりくむとともに、教育条件整備の改善を求める声をあげ続けようと参加者に呼びかけました。続いて、西面友史事務局長がコロナ禍のなかですすめた対府交渉や署名運動などのとりくみの経過を報告。各地域のとりくみ・意見交流では、「昨年度、府立支援学校を増設を求める請願署名を2万2500筆以上提出したのは重要な到達点。引き続き、府立支援学校の『過大・過密』解消のため頑張ろう」「学校現場の声を『設置基準』にもりこませるため、文科省へのパブリックコメントに積極的にとりくもう」などの声がありました。

子どもの心の声に耳を傾けよう

学習会講師の土佐いくさんは、冒頭、コロナ禍で子どものうつ・不登校とともに、痛ましい自殺も増えていると訴え。子どもの心のSOSをキャッチし、安心の居場所をつくるのが大事だと述べました。土佐さんは、子どもの作文を紹介しながら、「いまの時代、子どもも親も生きづらさを抱え、不安のなかで必死に日々を送り、明日をたぐり寄せようとしている」と述べ、そんな子どもと親の懸命さに寄り添うことの重要性を強調しました。

また、いま子育てと教育のなかで大切にしたいこととして、ひと

つ目は、子どもたちの心の声を丁寧に聴きとること、二つ目は、親たちが自分の大変さ、しんどさを語り合える場をつくること、さらに三つ目として、学校の先生や学童保育の指導員と親がつながっていくことをあげました。

そして、「子どもの心の声を聴く」ということは、子どもの言葉にならない行動から子どもの心をとらえることだと述べました。また、親が子どものことで「腹がたつ」「困る」と訴えているときは、実は子どもの方からの「SOS」「困っているからきいてほしい」という発信だから受け止めようと言いました。

なにがあっても絶対に見捨てない

土佐さんは「子どもの声を聴くためにどうすればよいか」について話をすすめました。それは、子どもが話しかけやすい雰囲気をつくること、大人も失敗する姿を見せて安心させてあげること、なに

り前」と話します。「大切なのは子どもや親を信頼すること」「いくらでもやり直せる。人間は生き直す力を持っている。子どもや親の力に信頼して、ともに生きよう」と土佐さんは呼びかけ、参加者を励ました。

自分自身の小学校教師時代の経験を振りかえりながら、「人間を育てる仕事は、そうそううまくはいきません」と語る土佐さん。「ましてや生きづらいこの時代、子どもも親も壁にぶつかって当た

閉会のあいさつでは、新会長の岩田美穂さんが、「コロナ禍で疲弊するみんなが元気になれる話を聞くことができました。明日からまた子どもの心の声に耳を傾けて、丁寧な関わりを大切にしていきましよう」と呼びかけました。

書記の KUSIJU

「私はこれからの社会をよくするキーワードは、ケアリング・シェアだと思っています。」と語るのは、エコノミストで同志社大学教授の浜矩子さん。ケアするとはお互いを思いやることと、その思いを分かち合い、共有するのがケアリング・シェア。

8割超の国民が五輪開催による感染拡大が「不安だ」と答へ(「朝日」6/21日付)、政府分科会の尾身茂会長が「この(感染)状況での(五輪)開催は普通でない」と発言する中、開催が強行されようとしています。「命をリスクにさらしてまで、五輪を開かねばならない理由は何か」を問われ、菅首相はまともに答へられませんでした。米紙ニューヨーク・タイムズは「(五輪強行の)理由は三つある。金、金、そして金だ」と。政治学者の白井聡さんは、「グローバル・パンデミック(国際的感染大流行)の最中になぜ五輪を強行するのか、普通の理性と良心があれば開催できません。要するに政権に普通の『理性と良心』がない。」と指摘します。

ふたたび、浜矩子さん。「元来、経済活動は人間の営みだ。人間による人間のための、人間しか行わない営みだ。だから、経済活動は人間を幸せに出来なければ、その名に値しない。」政府および東京都が五輪を強行開催する理由が問われています。彼女の著書『小さき者の幸せが守られる経済へ』は、人の痛みが解らない人々による偽りの経済活動を見分けるための勘所集になっていきます。優勝劣敗に一部の大きくて強い者だけが潤うような偽りの経済のありさまとその危うさから脱却するために、国民一人ひとりの小さき声にも耳を傾け、人の痛みに共感できる政治の担い手を選択する必要があります。

職場を越えて語り合うことって大切!

「子どものこと、授業のことを語る交流会」を開催

5月30日(日)に、大障教教文部主催連続講座③「子どものこと、授業のことを語る交流会」を開催しました。緊急事態宣言が発出されていたため、オンラインで行いました。少人数の参加者で、話したいテーマで気楽に交流をしました。語り合うことの大切さを改めて感じた、内容の濃い時間となりました。

「GIGAスクール構想」の現状は…

まず、「GIGAスクール構想」が話題になりました。タブレットは、全員分届いている学校も届いていない学校もありました。教員が授業で使ったり、子どもが休憩時間等に自由に使ったりと使い方も様々です。

知的障害校の先生からは、「かなトーク」や「sounding board」を使用してコミュニケーションの補助に使うなど主体的な動作を引き出すために積極的に利用している実践が紹介されました。訪問籍の子どもがリアルタイムの授業に参加したり、その子向けの授業をしたりしている学校もありました。

知的障害校の先生からは、雨の描画に取り組み、その前で合羽を着て写真撮影し、大型テレビで映した雨の絵本の最後にその写真も映すという実践が紹介されました。院内学級では、入院している子どもと入院前の学校をつなぐのに有効だという話もありました。ICT機器の有効性も確認しつつ、子どもたちには実物を使う大切さも語られました。

子どもの見方を伝えるには…

次は、子どもの見方や授業のことを、経験の浅い同僚教員にどうアドバイスすればいいかという悩みが出され、それぞれが自分を振り返りながら話をしました。

「すごい先生に出会うことが大切」と話されたのは、肢体不自由の学校がスタートだった先生です。「肢体不自由校で、子どもの手を持って動かしてしまふ先生が多い中、子どもが自分の力で制作にとりくめるよう授業をするすごい先生に出会った。実践を見るのが大事」と自身の経験を紹介しました。前職が保育士だった先生は、「他の先生のまねをしていた時は子どもの変化に気づけなかったが、自分自身がこだわりを持って実践するようになって子どもの変化に気づけるようになった」と話しました。

「シラバス」に縛られる

そして、子どもの「目に見える変化」を求めることに拍車をかけているのが「シラバス」だという話題になり、シラバスについて語り合いました。シラバスの疑問点として、段階を設定する時に、学年が上がった時のことを考えて、一年生では段階を低く設定するという傾向があることが多くの学校から挙げられました。「子どもの発達は階段のよう

に上がるという考えでシラバスは作られているが、発達横へ広がり汎化していくことが大切であるし、発達の節の前では退行したように見えることもある、そういったことが想定されていないことも問題点という意見も出されました。

最後に、「初任研がオンラインだったので、他の学校の先生と話せて元気をもらえた」と定期的にこんな機会を作ってほしい」と感想が出されました。



教文部主催 連続講座⑤
「授業実践をもちょうろ会」
 7月11日(日)
 午前10時~12時
 たかつガーデン105
 +オンライン

実践を紹介したい、実践からヒントを得たい方など、どなたでも参加可能です。お気軽にご参加ください。



オンラインで職場を越えてつながりました

知的障害校の先生からは、雨の描画に取り組み、その前で合羽を着て写真撮影し、大型テレビで映した雨の絵本の最後にその写真も映すという実践が紹介されました。院内学級では、入院している子どもと入院前の学校をつなぐのに有効だという話もありました。ICT機器の有効性も確認しつつ、子どもたちには実物を使う大切さも語られました。

知的障害校の先生からは、雨の描画に取り組み、その前で合羽を着て写真撮影し、大型テレビで映した雨の絵本の最後にその写真も映すという実践が紹介されました。院内学級では、入院している子どもと入院前の学校をつなぐのに有効だという話もありました。ICT機器の有効性も確認しつつ、子どもたちには実物を使う大切さも語られました。

知的障害校の先生からは、雨の描画に取り組み、その前で合羽を着て写真撮影し、大型テレビで映した雨の絵本の最後にその写真も映すという実践が紹介されました。院内学級では、入院している子どもと入院前の学校をつなぐのに有効だという話もありました。ICT機器の有効性も確認しつつ、子どもたちには実物を使う大切さも語られました。

<参加者からの感想>

○コロナ禍で、なかなか話す機会がない中で、今回ざっくばらんに日頃感じていることや教育実践の話の聞くことができたのはとてもよかったです。日頃自分が大切にしていることを再確認することができました。他校の先生とも交流できたことも元気をもらえました。またぜひ参加したいと思います。

○今日、zoomでの参加に少し緊張しましたが、みなさんの話を聞きながら、発言したい気持ちも自然とわいてきました。話を聞いていただきありがとうございます。コロナ禍で、交流が減り、他の学校の方と話す機会もほとんどない日々だったので、久しぶりに、いろいろな話が聞けて良かったです。いろいろな制約や、新たな動きがありますが、やはり大事なものは、どんな状況であっても、目の前の子どもを見て、教師集団で取り組むということだと改めて感じました。また、若い先生たちと一緒に、しっかりコミュニケーションをとって、取り組んでいきたいです。コロナ禍なので思うように集まれません、オンラインでも、いろいろな学校やいろいろな世代の先生たちと交流して、学びたいと改めて思いました。